

**L10a**            **2004年12月2日にOH大気光観測装置が捉えた現象は、ほうおう群の突発出現か？**

山本真行（高知工科大学）、大塚雄一（名大STEL）、塩川和夫（名大STEL）

2004年12月2日宵、名古屋大学太陽地球環境研究所が滋賀県信楽町に設置している大気光観測装置 (OMTI) のOH大気光チャンネルに流星飛跡状の現象が発見された。同装置は大気光を毎夜自動観測し、OH観測は720~910nmの波長域(\*1)である。他の大気光成分とのシーケンス観測のため、OH観測チャンネルは約6分間隔にて露出15秒のデータが得られる。同夜の日没後数時間のデータに通常見られない流星飛跡状の発光が数10例確認されたが、わずか15秒の露光中に複数例の現象が記録された画像もあり、多くのイベントの発生が推察される。OMTIは、北海道(陸別)、鹿児島県(佐多)、インドネシア、オーストラリアにも観測点があり、晴天の陸別で数例、天候条件の悪かった佐多でも数例の現象が確認された。低緯度の海外2観測点は悪天候であった。流星飛跡状の発光は、他の大気光チャンネルでは全く見られなかった。同現象が流星であるとすれば、輻射点方向は南西または北東の地平線近くに相当し、陸別より信楽のほうが多く観測しているため、南西側から飛来した可能性が高い。同夜に極大日が該当する通常流星群は存在しないが、南の地平線方向からの流星群として、最近母天体D/1819 W1 Blanpainとのリンクが指摘された、ほうおう群の突発出現を捉えた可能性も否定できない。また当夜に眼視や可視光観測での突発の報告は現在のところ知られておらず、OH大気光観測装置が速度の非常に遅い流星による赤外発光を捉えた可能性がある。

注：O<sub>2</sub>(0,1)の寄与をカットするため865nmにノッチを持つフィルター